東京教区時報

2007年4月8日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3－6－18
編集人　伊藤裕元

WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.htm　E-MAIL:comm.tko@nskk.org
Phone:03-3433-0987, Fax:03-3433-8678　Diocese Office

◇

普段の教会でのご奉仕に加えて、本日、第104（定期）教区会にご参集下さいまして感謝致します。

昨年11月の教区会の開会に当ってのご挨拶では、大きく分けて、二つのことを申し述べました。ひとつは、新しい聖歌が刊行された喜びとその意義について申し上げ、もうひとつは、本年2007年からの教役者体制がお蔭様で強化されてゆくであろうこと、それにともなって、今後教会・教区の財政負担が相当重くなることを訴えました。あの教区会から、まだそう時間を経ていない現時点で、その状況が大きく変化しているわけでもなく、またそれに対する秘策を急に編み出すことができたわけではありませんので、全く新たな視点から、教区の現況を分析し、それを皆さまと分かち合うということは難しかろうと感じています。ですから、これから申し上げますことは、いわば、11月に申し述べましたことの線上として、ご理解いただきたく存じます。

◇

11月の教区会では、未だ、新たに発足した「企画室」の報告の機会ではありませんでしたが、多くの議員諸兄姉のご発言の端々に、教区の現況に照らして、企画室こそ、ある希望に満ちた施策を打ち出してくれるに違いない、という熱い期待が表明されておりました。その期待に応えていただけたかどうかの実際の活動の報告は、そのご担当の方々に譲りますが、主教として大きく助けていただいた点を、ひとつだけ申し上げておきます。

主教職にある者として、6年目に入ろうとしており、当然のことを今さらのように指摘致しますのは遅きに失するかも知れま

《東京教区第104（定期）教区会》　開会演説

宣教・伝道とは何をすることか

神の恵みを共に分かち合う努力を

東京教区主教　植田仁太郎

せんが、聖公会は、「教区」が主教のもとに教会の実体となっている組織体ですが、実は、教区内の各教会の実状にある程度通じているのは、年間をとおして巡回している主教ひとりである、というのが、現実であると痛感しました。欧米の大きな教区では、充実した主教(あるいは教区の)スタッフ陣が、常に各教会の実状を把握しているシステムが確立しているのかも知れませんが、東京教区で、年に1回以上、各教会の現場を訪ねる機会を有しているのは主教だけです。その巡回の折も、時間的に限られていますし、派遣している教役者から、随時報告があるにしても、教区内の各教会の現実を常に複数の者が共有するシステムにはなっておりません。(教会グループで定期的に牧師会や協議会が持たれるようになったこと、それに、「信仰と生活委員会」に教会グループの代表が加わるようになったことは、以前に較べて、各教会の現実が共有されるようになった、改善された点です。)

この点で、企画室の方々が主教と一緒にいくつかの教会を訪ねて下さり、その教会の方々と直に接し、お話し合いをして下さったことは、主教職に在る者にとっては、それぞれの教会が、どういう難しさと、どういう可能性を有しているかを見てゆく上で、それが自分ひとりの観察と判断ではなくなる、とういうことになり大変有難いことでした。

◇

同じように、財政委員会では常々、各教会から提出される統計表を分析し、各教会の実情を数字の上から把握して下さる努力をして下さっています。また先週は、久しぶりに、各教会の会計担当者の会合を持って下さり、財政面での今後の見通しを共有して下さいました。まだ詳しくご報告をうかがっておりませんが、数字の上では、各教会と教区の近い将来の姿は、相当危機的なものであることを、ここ数年、くり返し指摘されているように、多くの教会が訴えられたようです。

◇

その危機に対する教会の最大の努めは、宣教・伝道であるということも、しばしば自明のこととして叫ばれますが、もう一度、宣教・伝道とは何をすることかを、考えてみたいと思います。

この席で、宣教論について講義や説教をするつもりはありませんが、現代の教会の主流で考えられていることにちょっと目を向けてみましょう。教会の歴史をふり返ってみますと、日本に聖公会の宣教が開始されたのも同じ時代ですが、19世紀後半に、世界的な規模で、伝道活動が活発に起り主として欧米の教会から、何千・何万という献身的な宣教師・伝道者が、アジア・アフリカ諸地域に派遣されてゆきました。その当時の伝道者の気概を、当時アメリカで起っていたいわゆる信仰覚醒運動の指導者達に見てとることができます。ある人は、自分たちは、「世界を今世紀中(1900年までに)キリスト教化しよう」というヴィジョンを持っていたと語っています。その気概は、「キリスト教化」することが、世界と人間の諸問題の一切を解決する道だという考え方に基いていますし、主として欧米の教会指導者と伝道者の理解した「福音」もしくは「キリスト教」が、真理であって、それを知らない人々は、気の毒にも迷妄や迷信のうちにあるとの見方が前提になっていました。

19世紀以降の宣教師達と伝道者達の献身とその払った大きな犠牲、またその偉大な貢献に、私は何ら、疑義を呈するものではありませんが、そういう人々を送り出した、当の宣教団体や教団の中から、やがて、大きな反省が生まれることになります。それは二十世紀中盤以降のエキュメニカル運動に顕著に表明されることになりますが、伝道・宣教というのは、教会やキリスト者が、まさに真理を所有していて、それを所有していない哀れな人々に伝えてゆく、というものではない、ということ。また、教会やキリスト者は、社会や人間にとって大切な価値を知っており、それを知らない

人々より優位に立っているのだから、それを知らない人々に分け与える、というものでもない、ということ。さらにその反省には、欧米で影響力を持っていたと考えられた教会やキリスト者が、二度にわたる大戦争を防げなかったし、植民地主義の悪、帝国主義の悪を指摘することができなかった、というざんげも含まれていました。そこに所有していたと思っていた真理は何であったのか、経済的・軍事的に支配力の強かった国家や民族の枠の中でだけ都合の良い真理を真理としていたのではなかったかという反省でした。さらに二十世紀が進むと、世界的規模で進行している未曾有の自然破壊・環境破壊が自覚されるようになり、これにも、教会もキリスト者も神学も無力であったことが痛切に指摘されるようになりました。そこでも、教会が「知っている」はずの真理とは何であったのかという反省が生まれました。

そういう深刻な反省の中に身をおくことになった教会は、ただ、これまでのように、教会の「正しさ」を、その正しさの無い人々や社会に述べ伝える、というのが伝道・宣教ではないだろうということに気づきます。むしろ、社会で弱い立場にある人々と共に歩みつつ、そこで働き・現れてくる神さまの真理を共に見出し、共に指し示してゆくことこそ教会の働きであり、宣教であると理解するようになりました。同時に教会は、イエス・キリストの身体として、実際のイエスがそうであったように、あらゆる人々に、ゆるしと和解と慰めと人間の尊厳といのちを回復する道具となってゆくことに努めることも、これまた宣教であり伝道であると考えられるようになりました。教会が、教会が伝統的に語ってきた「正しさ」をもっと声高に、もっと執ように主張していれば、その「正しさ」を知らない人々が自然に気づき、教会の門をたたくようになるだろう、と考えるにはまさにごう慢です。反対に、教会は単なる住民サービス・センターとしての役割を負っていれば、やがて分かってもらえる、というのでもありません。

また、教会の伝道・宣教は、教勢拡大のための会員増強キャンペーンでもありません。教勢拡大のためのいくつかの手法が確立していて、それを採用しさえすれば、どこでもその効果が表れるというものではありません。人々が福音の恵みに気づき、神さまの方向へと人生を向けるようになる、というのはいわば奇跡が起るようなものです。そのことは、神さまの力が無い限り起ってこないでしょう。もし、私たちが、キリストの福音に接し、教会の交わりの中でひとりの人間としてのいのちを豊かにしていただいおり、その交わりを拡げてゆきたいと願うとすれば、それが宣教・伝道の第一歩です。その願いをただちに、教会と無縁の人々に持ち込んだり、ぶつけたりすることはできません。私たちの家族に対しても、そんなことはできません。

しかし、教会全体を、教会と無縁な人々の方にいくらかでも近付ける、という努力はできるはずです。私たちの「持っている真理」を分けてあげるのでもなく、あの人達が知らないことを「教えてあげる」のでもなく、共に神さまの恵みに気づけるよう、教会全体が、今まだ教会と無縁な人々の方に近づく努力をすることが必要でしょう。それが、それぞれの教会で、どうすることなのかを是非それぞれの教会で必死に考え、それを試みて欲しいと思います。そのことが、それぞれの教会に新しい人間の渦を生み出し、私たちは、まさに恵みを分ち合うことができるのだ、という体験をすることになるでしょう。

そのことを常に念頭におきつつ、特に主日以外の週日に、教会を人々の方に「近づける」活動のために何かできることはないか、聖職ともどもそれぞれの教会で必死に考えていただきたいと思います。私にも、いくつかアイディアが浮かばないわけではありませんが、それぞれの教会の現場で、その教会の持っている弱さや、あるいは可能性を検討しつつ、その在り様を、考えていただ

きたいと思います。

◇

宣教・伝道をめぐってまだまだ申し上げなければならないことは沢山ありますが、数字に表れている危機に対して、教会のこれまでの反省を踏まえつつ、私たちが新たなことを始めない限り、どこにもそれをただちに解決する道はないのだということを自らに課してゆきたいと思います。

◇

これをもって開会のご挨拶、並びに今年の教区・教会が心得ていただきたいことの表明と致しますが、どうしても、このような教区の公の場で共有しなければならいことがございます。

それは、昨年の4月以来、この1づ年間聖公会神学院をめぐって生じた事態です。これには、前東京教区所属の神学生と東京教区の聖職が直接関わっており、常置委員会でもたびたびその事態について検討致しました。しかし、この開会のご挨拶に含める事柄というより、みなさんの持っていらっしゃる疑問にもお答えできるよう、議事の中に加えるのが適当であると判断致しました。具体的には、通常の常置委員会の報告をしていただいた後に「神学院をめぐる問題と東京教区の理解」という特別の時間を教区会の一部として、約40分から1時間取りたいと考えておりますのでよろしくご了承いただきたいと存じます。

ご静聴ありがとうございました。

《東京教区第104(定期)教区会》
2007年3月21日・聖アンデレ主教座聖堂
〔編集・制作＝広報委員会〕